

14	神奈川県立綾瀬西高等学校	全日制	普通科	H26—H28
----	--------------	-----	-----	---------

## 平成 27 年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

現行の高等学校教育課程の基準によらず、特別支援教育における自立活動に相当する指導等を行う特別な指導の領域を設け、高等学校普通科における特別支援教育を充実させ、障害やその可能性のある生徒の自立や社会参加の推進を図るための研究開発。

### 2 研究の概要

- (1) 高等学校普通科において、教育課程の特例を設け、通級による指導・支援を行う。
- (2) 学習支援のためにリソースルームの整備・活用について研究する。
- (3) 通常の学級、及び一斉指導における個々の能力・才能を伸ばす支援・指導について研究する。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究開始時の状況と研究の目的

本校には、様々な課題を抱えて入学する生徒が多く、進級・卒業することができずに中途退学する生徒も少なくない。研究開発を開始する直前の平成 25 年度卒業学年の中退率は 7.6%（平成 24 年度学校基本調査全国平均 1.6%）であった。また、障害やその可能性のある特別な支援や指導が必要な生徒が約 5 名在籍していた。本校では以前から、校内委員会を設置し、教育相談コーディネーターを中心にケース会議を定期的に関開くなどして、様々な教育的ニーズのある生徒の支援に当たっているが、結果的に十分な支援が出来ていなかった。

本校に限らず、高等学校全日制普通科においては、小・中学校に比べて、生徒個々に対する支援体制の整備が進んでいない傾向があると考えられる。そのため、当研究を契機として、現行の高等学校教育課程の基準によらず、弾力的な教育課程を編成し、障害やその可能性のある生徒の指導方法を研究し、本校生徒に対しての支援を充実させるとともに、その成果を広く普及させることが必要と考えた。

高等学校全日制普通科に在籍する支援や配慮が必要な生徒は、義務教育段階とは異なり、二次障害のため、自己肯定感や自尊感情が持てない傾向にある。そこで、本研究にあたっては、高校生という発達段階を踏まえて適切に行うことにも配慮する。

本校も含めて、高等学校全日制普通科に在籍する、障害等特別な支援が必要な生徒に対する支援を充実させることや、中途退学率の低下にも資することにつなげていくことを、本研究の目的とする。

#### (2) 研究仮説

現行の高等学校教育課程の基準によらず、特別支援教育における自立活動に相当する指導等を行う特別な指導の領域を設けて履修させ、高等学校普通科における通級による指導の充実を図ることで、障害やその可能性のある生徒の自立や社会参加の推進を図ることができると考えた。

### (3) 教育課程の特例

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数 ・単位数等
リベラルベーシック I	社会参加に必要な基礎学力の向上を図る領域とし、週に英語 1 時間、国語 1 時間、数学 2 時間の合計で 4 単位とする	4
コミュニケーション	ソーシャルスキルの要素を含め社会的自立や社会性の獲得を図る領域	2
ソーシャルスタディ	生活能力の向上を図るための領域	2
社会参加・社会福祉体験	職業選択や職業生活を営むために必要な能力を高める指導の領域、本校の福祉教育の実績を活用	2

### (4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

#### 指導方法等の特徴

- 通常の学級での一斉授業においては、外部支援者である学習支援員が加わり、本校でつまずきの多い傾向にある理数系科目や英語、長いカタカナの間違いが目立つ世界史等の授業で机間指導や、教科担当者の指示のもとで生徒たちに声かけを行った。また、通常の学級の各教室に順次、巻き取り式のスクリーンを常設し、プレゼンテーションソフトや書画カメラを活用した授業を積極的に実施した。
- 職員対象の支援教育研修会は年間で 5 回開催し、生徒がどのような点でつまずきやすいのか、その生徒にどんな指導の工夫ができるのか、一斉指導の中でできる個別支援について講師を招き、本校職員が個別支援を紹介するなどの研修を行った。

#### 一斉指導の工夫

- 本校の生徒は、通級による指導対象の生徒以外にも、診断等はされていないが、一斉指導の中での学習についていくことが難しい生徒や、視覚的構造化がなされた内容の方が理解しやすい生徒も多い。そのため、連絡事項等は所定のホワイトボードに貼付し、黒板上の情報を最小限にすることや、一斉授業における教科指導においても ICT を活用した授業実践を行っている。また、学習支援員が通級対象が在籍する生徒のクラスを担当した際には、その生徒に目を配りつつ、他の生徒にも声かけを行う等、羞恥心や自尊心に配慮して対応した。
- 指導方法については、研修会等を通じて得た情報や工夫を活かし、生徒の能力の向上を図りながら、座席やチョークの色の配慮、定期テスト時の別室受験や時間延長等、生徒の特性や障害に合った手立てを検討した。

## 4 研究の経過等

### (1) 教育課程の内容

平成 27 年度

- 通級による特別な指導が必要な生徒を特定し、個々の困難の状況やニーズに応じた通級による指導や支援を行う。対象生徒の特定は、発達障害等のある生徒及び学習・行動面等に課題があると思われる生徒を挙げながら、担当者会議で支援の必要性について検討する。
- 特別支援学校の経験がある本校教職員や、大学・NPO 法人等で通級による指導及び特別支援教育に精通している自立活動アドバイザーによる観察・面談を丁寧に繰り返し行い、通級対象生徒を決定する。
- 通級対象生徒及び保護者への説明を繰り返し行い、同意を得た上で研究計画を進めると共に、全保護者への理解を進める。
- 学校設定領域の「リベラルベーシックⅠ」「リベラルベーシックⅡ」「コミュニケーションⅠ」「コミュニケーションⅡ」「ソーシャルスタディ」、職業選択や職業生活を営むための領域「社会参加・社会福祉体験」について、図書・視聴覚教材を活用した図書室等での学習や自立活動の視点を盛り込んだ教材の開発、支援及び評価方法に関する実践及び検討を行う。
- 「リベラルベーシックⅠ」「リベラルベーシックⅡ」においては、生徒の自己特性理解を深め、自分に適した学習方法を見つけることができるように教員と共に話しあいながらみつけていく。
- 「コミュニケーションⅠ」「コミュニケーションⅡ」については、場に応じたコミュニケーションができるように、卒業後、進路先で必要とされる挨拶等について疑似体験等やグループ学習で教員とかかわりながらコミュニケーション能力を高める。
- 「ソーシャルスタディ」では社会生活で必要なことを、疑似体験等を通じて具体的に学んでいく。
- 「社会参加・社会福祉体験」については、特別支援学校等の「産業等の現場実習」を参考にしながら、生徒が自己の特性を理解しつつ、自己の課題を認識できるように、DVD 視聴やビデオ撮影を行って事前・事後学習につなげる指導内容等を検討する。
- 教職員の知識向上のための研修会等を重ね、支援教育に学校全体で取り組む。
- 通常の学級における構造化された授業及び学習支援について研究・検討する。
- 特別支援学校や小・中学校とも連携し、通級の運営やICT活用の指導・助言を得て進めていく。
- 学習支援員や自立活動アドバイザー等との協働による「授業支援の在り方」について検討する。

## (2) 全課程の修了認定の要件

「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」に基づき、生徒の実態に応じた特別な領域の指導・支援を行うことで、目標の達成度等を、生徒の自己評価を踏まえながら具体的に確認し、達成度に相当する単位の認定を行う。

## (3) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 校内に研究推進組織を設置する。</li> <li>○ 特別支援学校など、外部機関との連携方法を検討・構築する。</li> <li>○ 通級による指導方法の研究を行う。</li> <li>○ 通級による学習指導のために、リソースルームを整備・活用する。</li> <li>○ 個々の生徒の実態に即した進路支援のあり方を検討する。</li> <li>○ 特別な領域「リベラルベーシックⅠ」「コミュニケーションⅠ」の教材開発、支援・指導方法及び評価方法に関する検討を行う。</li> <li>○ 外部講師による校内研修を行う。</li> <li>○ 県内外の先進校の視察を行う。</li> <li>○ 発達障害に関する学会へ参加する。</li> <li>○ 運営指導委員会による事業の評価及び指導・助言を受けて、これまでの取組を振り返り第2年次以降の事業の進め方について検討する。</li> </ul>
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 通級による指導や支援方法の研究を引き続き行うと共に支援対象生徒への個に応じた支援方法等の整理を行う。</li> <li>○ 特別な領域「リベラルベーシックⅠ」「コミュニケーションⅠ」の教材、指導方法及び評価方法に関する実践・検証を行う。</li> <li>○ 特別な領域「リベラルベーシックⅡ」「コミュニケーションⅡ」「ソーシャルスタディ」、職業選択や職業生活を営むための領域「社会参加・社会福祉体験」の教材開発、支援・指導の方法及び評価方法に関する検討を行う。</li> <li>○ 生徒の実態に応じたインターンシップ先を開拓し社会参加・社会福祉体験を実施する。</li> <li>○ 個々の生徒の実態に即した進路支援の在り方を引き続き検討する。</li> <li>○ 特別支援学校などの外部機関との連携方法を検証する。</li> <li>○ 教職員の支援教育への意識を高めるために、外部講師による校内研修を行うとともに県内外の先進校の視察を行う。</li> <li>○ 本研究の他の研究協力校と情報共有・意見交流等を積極的に行う。</li> <li>○ 発達障害に関する学会へ参加し、他県の研究協力校とシンポジウム等を開催し、高校の通級による指導の在り方等について検討する。</li> <li>○ 運営指導委員会による事業の評価及び指導・助言を受けて、これまでの取組を振り返り第3年次以降の事業の進め方について検討する。</li> </ul>
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 通級による指導や・支援方法の研究を引き続き行うと共に支援対象生徒と個に応じた支援方法等の整理を行う。</li> <li>○ 特別な領域「リベラルベーシックⅡ」「ソーシャルスタディ」、職業選択や職業生活を営むための領域「社会参加・社会福祉体験」の教材開発、支援・指導及び評価の方法に関する実践及び検証を行う。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生徒の実態に応じたインターンシップ先を開拓し社会参加・社会福祉体験を実施する。</li> <li>○ 個々の生徒の実態に即した進路支援の在り方を引き続き検討する。</li> <li>○ 特別支援学校などの外部機関との連携方法を検証する。</li> <li>○ 教職員の支援教育への意識を高めるために、外部講師による校内研修を行うとともに県内外の先進校の視察を行う。</li> <li>○ 本研究の研究協力校と情報共有・意見交流等を積極的に行う。</li> <li>○ 発達障害に関する学会へ参加し、研究協力校とシンポジウム等を開催し、高校の通級による指導の在り方等について検討する。</li> <li>○ 運営指導委員会による事業の評価及び指導・助言を受けて、これまでの取組を振り返り、成果をまとめる。</li> </ul>
--	---

#### (4) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 支援教育の専門性向上についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 校内の研究推進組織についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 通級の規定、運用、環境整備についてのアンケートによる検証(担当教職員対象)</li> <li>○ 特別支援学校など、外部連携機関との連携についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 通級による指導の対象となった生徒及び保護者に対するアンケートによる検証</li> <li>○ 運営指導委員会による第1年次の振り返りと成果の確認</li> </ul>
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 支援教育の専門性向上についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 校内の研究推進組織についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 通級の規定、運用、環境整備についてのアンケートによる検証(担当教職員対象)</li> <li>○ 特別支援学校など、外部機関との連携についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 特別な領域「リベラルベーシックⅠ」「コミュニケーションⅠ」についてアンケートによる検証(担当教職員対象)</li> <li>○ 特別な領域「リベラルベーシックⅠ」「コミュニケーションⅠ」についてアンケートと面接法調査による検証(生徒対象)</li> <li>○ 職業選択や職業生活を営むための領域「社会参加・社会福祉体験」の内容、実施状況についてのアンケートによる検証(担当教職員対象)</li> <li>○ 職業選択や職業生活を営むための領域「社会参加・社会福祉体験」の内容、実施状況についてのアンケートと面接法調査による検証(生徒対象)</li> <li>○ 通級による指導の対象となった生徒及び保護者に対するアンケートによる検証</li> </ul>

	<p>トによる検証</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 運営指導委員会による第2年次の振り返りと成果の確認</li> </ul>
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 支援教育の専門性向上についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 校内の研究推進組織についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 通級による指導の規定、運用、環境整備についてのアンケートによる検証(担当教職員対象)</li> <li>○ 特別支援学校など、外部機関との連携についてのアンケートによる検証(全教職員対象)</li> <li>○ 特別な領域「リベラルベーシックⅠ」「リベラルベーシックⅡ」「ソーシャルスタディ」、職業選択や職業生活を営むための領域「社会参加・社会福祉体験」についてのアンケートによる検証(担当教職員対象)</li> <li>○ 特別な領域「リベラルベーシックⅠ」「リベラルベーシックⅡ」「ソーシャルスタディ」、職業選択や職業生活を営むための領域「社会参加・社会福祉体験」についてのアンケートと面接法調査による検証(生徒対象)</li> <li>○ 社会参加・社会福祉体験の内容、実施状況についてのアンケートによる検証(担当教職員対象)</li> <li>○ 社会参加・社会福祉体験の内容、実施状況についてのアンケートと面接法調査による検証(生徒対象)</li> <li>○ 通級による指導の対象となった生徒及び保護者に対するアンケートによる検証</li> <li>○ 運営指導委員会による3年間の振り返りと成果の確認</li> </ul>

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### 対象生徒への効果

- 通級による指導対象生徒3名には、通級で受けている授業に関して聞き取り調査を実施した。3名の生徒それぞれが、通級による指導について「楽しい」「良かった」と答えており、個別の支援を肯定的に捉えている。しかし、中には、自分が通常のクラスから出て通級による指導を行うクラスに向かう際に「保健室へ行って来る」と友人に話している生徒もおり、生徒個々の自尊心に配慮しながら周囲の生徒にどのように理解を促すのか、課題である。
- 計算力や時事問題の知識、文章力、英語の単語力、人前で話す力、人とコミュニケーションを取るための力、PCやタブレット端末を活用する力、将来に対する意欲、仕事や働くことの知識がステップアップした、と回答を得ている。通級による指導を受けることに関しては、「クラスで受けるよりわかりやすい」「来年度も受けたい」「4月当初はクラスから抜けてくることに抵抗があったが、今は楽しい」との感想が出された。
- 領域授業担当者9名には、アンケート調査を実施した。その中で指導の効果としては、

「3名の生徒が意欲的に取り組むようになり、自分の特性を理解した上で、学ぶべきことを考える良い機会となっている」「場をわきまえない発言で毎回授業中に注意を受けることや、声が小さく、毎回書く感想の文章量が増えない等が見受けられるが、できたことはほめながら、指導の積み重ねを行いたい」等の記載があった。

- 一斉指導で学習支援員が配置されたクラスの生徒からは、「しゃべりやすく、聞きやすい」「丁寧に教えてもらっている」という反応があった。教員とは違う存在の学習支援員が、生徒と教員との架け橋になるケースもあり、今後も継続して配置する必要がある。
- ICTを活用した授業に関しては、生徒からは好評であるが、スクリーンや教室の明るさの問題や、映し出される字の大きさの問題等、今後教員が研究・改善を重ねる必要がある。

### 通級による指導の対象生徒の感想

生徒A	特に、学校紹介の写真を撮るのが楽しかった。普通の授業より楽しい。人が少ないと聞き取りやすい。ペースを合わせてもらえる。
生徒B	一番楽しかったのは、掃除の授業と、タブレットでのプレゼンテーション等。最初の頃はイヤイヤだったけど、今はそうでない。3年になってまた受けてみたい。
生徒C	すごくいいです。特に、スクイージが面白かった。古典よりこっちを取って良かった。来年もこの授業を受けたい。

### 教員への効果

- 今年度に関しては、校内組織である「研究開発会議」を各教科及び関係するグループから代表者を選出し、総勢13名で2カ月に1度程度定例会議を行った。研究開発会議は、職員集団のおよそ4分の1にあたる15名で構成し、多くの教員で運営に携わることができた。
- 年間5回行っている研修会について、今年度は「支援教育の視点を取り入れた教育実践の拡大」をテーマに研修会のプログラムを設定した。本校生徒の特性や特徴を踏まえて、必要な支援や配慮を行う力を向上させるために、今年度の研修会を企画した。
- 今年度の職員アンケートでは、「発達障害等の生徒に対する高等学校への支援の必要性」に関する否定的な回答は、2%ほどになるまで職員の意識が変化している。しかし、「本校での個別の支援・指導が必要な生徒への対応」が進んでいるかどうかについては、22%の職員が、対応はまだ不十分であると回答している。
- 4領域の授業担当者9名への「通級による指導の運営」に関してアンケートの中で、本校での通級による指導に「課題がある」と答えており、「TTでも互いの打合せ時間が取れない」「教材準備等にかかる時間がない」「通級で使用できる教室が足りない」等の回答が多く挙がった。一方で、「4月当初は負担感が強かったが、今はペースや目標が見えて少し負担感が減った」との記載もあった。

- 今後は、通級による指導のノウハウを全職員で共有し、誰でも通級による指導やそのノウハウを活かした通常の学級での指導を進めていけるよう、授業研究や教材研究等ソフト面の整備を更に充実させる必要がある。

## **保護者等への効果**

### **(保護者)**

- 研究開発の実施により、「リソースルーム」の整備や通級による指導を実施していることについて、PTA 総会等で周知した。個々の生徒に対して、実態に応じた丁寧な指導を行い、地域との連携を強化するために、PTA 常任委員会等を通じて「社会生活・社会福祉体験」の体験先の紹介を PTA に依頼した。
- 研究開発により「個々の能力と才能を伸ばす」ための保護者からの教育相談が増えた。

### **(他の生徒)**

- 誰にでもわかりやすい授業を実施するために、授業の構造化を心がけた。
- 学習支援員との協働授業により、支援や配慮が必要な生徒を中心に個別に学習指導を実施したことにより、気軽にわからないことを学習支援員に質問することができるようになった。
- 生徒指導においても、ADHD・LD 等の生徒の特性理解に基づいた指導が行われるようになった。
- 予鈴チャイムを導入したり、朝の連絡事項をホワイトボードに記入したりするなど、教育環境を整備することで、生徒が落ち着いて授業を受けることが出来るようになった。

### **(その他・地域の理解等)**

- 「社会生活・社会福祉体験」の授業においては、地域の事業所と連携することで、文部科学省の研究開発校であることが理解され、「丁寧な個別支援を実施している」高校であることが周知された。

## **(2) 実施上の問題点と今後の課題**

- 1つの学年の通級による指導で4領域を担当する教員の時間数は、4領域で8名以上の教員配置が必須である。来年度は、2学年に通級による指導を行うため、2学年に通級による指導を行うため、16名以上の担当者が必要となり、教員の確保が急務であると考えられる。
- 時間割を編成するうえで、来年度は、通級による指導が2つの学年にまたがるため、教員の配置等時間割を編成することが厳しくなる。

- 来年度は、対象となる生徒が2学年と3学年の生徒となり、リソースルームだけでは、通級授業を行うことができない可能性がある。そのため、通級による指導と使用できる教室を増やす必要があり、現在、校内で調整中である。教室を増やした場合には、整備が必要となってくる。
- 領域の授業で使用する教材研究や、チーム・ティーチングで実施するための教員間の打合せにかかる時間が不足している。今年度、校内組織である「研究開発会議」については、教員の時間割の中で毎週50分間、会議が持てるよう設定したが、教材研究や打合せ時間にかかる時間の確保が課題である。
- 現在領域の授業を担当している教員以外にも、通級による指導の知識や授業方法、授業内容の共通理解を図る必要がある。今後、研修会や授業研究の場が持てるよう計画していきたいが、研修会や授業研究の時間が確保が課題である。
- 今年度、通級による指導の対象とした生徒に対して、個別の指導計画の書式を整えた。しかしながら、個別の指導計画の活用についてといった課題がある。また、個別の指導計画と個別の教育支援計画を作成するにあたり、教員の専門性を向上させる必要があると考える。
- 発達障害等についての知識をもつ教員が増えてきたが、他の生徒に対する障害者理解について指導ができる教員の専門性を向上させる必要がある。
- 今後、高等学校における通級による指導について、特別支援学校高等部の自立活動を参考にしながらも、高等学校だからこそ出来る自立活動、そして社会移行支援を意識した通級による充実した支援を考えていくべきである。